

# 中央ユーラシア・テュルクの叙事詩に 描かれる「異民族」

坂 井 弘 紀

はじめに

1. 英雄叙事詩と周辺民族
2. キジルバシュ
3. カルマク
4. ロシア
5. 中国

おわりに

## はじめに

中央ユーラシア<sup>1</sup>のテュルク系諸民族に伝わる叙事詩で、主人公の勇士が戦う相手は実在した民族集団であることが多い。デブやアルプ<sup>2</sup>など超自然的性質を持った存在と戦うことも珍しくはないが、外敵として登場するのはモンゴル系カルマクやロシアなど、中央アジアの周辺で彼らと歴史的にさまざまなかかわりを持った人々なのである。人々の歴史の「記憶装置」であった叙事詩には種々の情報が含まれているが、そこに周辺地域の人々がどのように描かれているかを知ることで、この地域の人々が自らと「異なる集団」をどのようにとらえていたかを理解することが可能となるであろう。

本稿では、中央ユーラシアのテュルク系民族の叙事詩を題材に、そこにどのような「異民族<sup>3</sup>」がどのように描かれているかを整理し、異文化をもつ周辺地域の人々との関係がどのようなものであったかを論じてみたい。多様な「民族」からなる中央ユーラシアの「民族意識」や周辺「異民族」との関係の実態を知る上での基礎的な情報を提示できればと思う。

## 1. 英雄叙事詩と周辺民族

中央ユーラシアのテュルク系諸民族の口碑には古くからさまざまな周辺地域の「異民族」が描かれてきた。周辺民族との戦いを描いたもっとも古い作品に「アルプ・エル・トゥンガ」がある。「アルプ・エル・トゥンガ」は、11世紀にマフムード・カーシュガリーが著

した『テュルク語集成』にその断片が載せられているだけで、全体が後世にまで伝えられてはいないが、紀元前7世紀のイランとテュルクとの戦いを反映していると指摘されている<sup>4</sup>。また西アジアに移動していったオグズ族に伝わる『オグズ・カガン』伝承にも、キプチャクやカルルクなどのテュルク系諸部族が擬人化される形で、歴史的状況が反映され、何らかの歴史的状況を読み取ることが可能だと考えられている。

これらの作品はいずれも早い時代に語られなくなり、ある時期に書き取られたものが後世に伝えられるようになった作品である。こうした作品は少数であり、テュルク系叙事詩作品のほとんどは比較的最近まで語り継がれ、その多くは19-20世紀になって採集・記録されるようになったものである。それらには様々な「異民族」が主人公の敵として描かれるが、それらのうち主たるものはキジルバシュ、カルマク、ロシア、中国である。以下、これら四つの「異民族」がテュルク叙事詩にどのように登場するか、具体的な例をあげながら、それらについて論じていくことにする。

## 2. キジルバシュ

キプチャク族の英雄コブランドウを主人公とする、カザフやカラカルパクなどに伝わる『コブランドウ・バトゥル』では、キジルバシュがキプチャク草原の遊牧国家ノガイ・オルダを攻めて、苦しめたと歌われる。

クズルバス<sup>5</sup>の国から、カザンという勇士が現れた。

素性の分からぬ悲しみがあつた。

ノガイの多くの民を、略奪して、攻め立て、迫害した。

従わぬものを駆逐し滅ぼし、絶やさせた。

土地を家畜を奪い去り、そこを通り過ぎていった。

家畜や財産を捨て去って、ノガイの人々は逃げ去った<sup>6</sup>。

ここでいう「クズルバス（キジルバシュ）の国」がイランを意味していることは確かであろう。キジルバシュは、中央アジア側からはイランの軍隊からシーア派信徒やイラン人、さらにイランそのものを指したからである<sup>7</sup>。キジルバシュは、もともとは16世紀のイランに勃興したサファビー朝を支えた遊牧民の軍事集団を表す言葉であった。キジルバシュはサファビー神秘主義教団の長イスマーイール1世を慕い、彼を助けてシーア派（十二イマーム派）を国教とするサファビー朝の開設に多大な貢献をした。なおキジルバシュとは、テュルク語の字義的には「赤い頭」であるが、これは彼らが赤い棒を12の布で巻いたターバンをかぶっていたことに因んで付けられたためである。

ノガイとは、15世紀から17世紀にかけて、カスピ海北岸のキプチャク草原に興ったノガイ・オルダを指している。ノガイ・オルダは15-17世紀の中央ユーラシアにおいて、大き

な影響力をもつ国家であった。叙事詩のこの節がサファビー朝とノガイが戦っていた16世紀後半のユーラシア中央部の状況を歌っていることは間違いない。『コブランドゥ・バトゥル』では、歴史上の人物は登場せず、登場人物はみな架空の人物であり、また、この作品がいつの時代を背景としているかについても、ある特定の限られた時代ではなく、キジルバシュの活躍した16世紀、あるいはノガイ時代である14-16世紀、カルマクとの抗争があった17-18世紀とさまざまな時代を多層的に反映しているといわれる<sup>8</sup>。そのため、この作品から特定の具体的な歴史的出来事を読み取ることは難しいが、この作品では、歴史的イメージとして、あるいは舞台装置としてキジルバシュとの戦いが設定されているものといえよう。

さて、このほかに主人公がキジルバシュと戦う叙事詩として、16世紀の歴史状況を具体的に詳しく映し出した作品『カラサイ、カズ』や『アディル・スルタン』があげられる。『カラサイ、カズ』と『アディル・スルタン』の登場人物は、『コブランドゥ』とは異なり、歴史上実在した人物であることが特徴的である。なお、これらの作品は、ノガイ・オルダの歴史を有力者たちの動きを軸に描いた一連の叙事詩「ノガイ大系」としてまとめ称される。

16世紀に現在のイランを中心とした領域を支配したサファビー朝は、オスマン帝国とならぶ西アジアの強大な国家として知られ、オスマン帝国やその属国であるクリミア・ハン国と抗争を広げた。ノガイ・オルダのうち、クリミア・ハン国と友好な関係を保つグループ<sup>9</sup>はオスマン帝国の側に立ち、しばしばサファビー朝と戦った。サファビー朝はキジルバシュの名で認識され、叙事詩にも往時の戦いがキジルバシュの名で刻まれているのである。

では、クリミア・ハン国やノガイ・オルダとキジルバシュとの関係がどのようなものであったかを具体的に見ていこう。まず、オスマン帝国とサファビー朝との敵対関係やノガイ（小ノガイ）とクリミア・ハン国がオスマン帝国の命令に従っていた様子は、ノガイに伝わるヴァリエーションでは次のように歌われる。

（クリミアのアディルが）20歳になった時、  
偉大なトルコのパシャからの  
馬の列がやってきて、勅令を届けた<sup>10</sup>。

クリミア・ハン国のアディル・スルタンがサファビー朝へ攻撃を行ったのは、1580年代であるため、ここでの「偉大なトルコのパシャ」、すなわちオスマン皇帝はムラト3世（在位1574-95）を意味しよう。オスマン皇帝の勅令を受け取ったアディルは、早速サファビー朝との戦いの準備を行う。

数日のうちに戦いの準備を行った  
食料を水とともに送った、塩とともに軍勢を送った  
イスンの息子勇士スレイマンを軍隊の長にした。  
オラクの息子勇士カラサイを軍隊の護り手にした。  
さあ、すべきことは行った。  
(そして) クズルバスなる敵国の国境に向かった<sup>11</sup>。

クリミアの王子アデイルは、オラクの息子のカラサイを将軍の一人に任命している。カラサイはノガイ・オルダの有力者の一人で、クリミア・ハン国と近い人物として知られる。16世紀後半に実在したカラサイは、アデイルと並んで、多くの叙事詩に歌われている。カラサイをはじめとする優秀な戦士がアデイルの元に集まり、出陣した様子是这样歌われる。「敵クズルバスに向かうため、故郷に別れを告げ出発した。4万の軍勢は武装し、青い鉄に身を纏い、戦士たちは進んでいった。総大将はアデイルであった。」<sup>12</sup>

出陣したクリミア軍とキジルバシュとの戦いは、キガシュという場所で行われたと伝えられる。「そのころキガシュの山にはクズルバスという強敵がいて、そこに行くものはみな殺された。クリミアの若いハン、アデイルは軍隊を召集し、クズルバスと戦うためにキガシュ山に向かおうとしていた。4万の兵力でも破れないほど敵は強かった」<sup>13</sup>。キガシュは、カスピ海北岸のアストラハンの北東にあるキガシュに比定されよう。現在、ロシア領に属しているキガシュはアストラハンとカザフスタン西部の町アトゥラウとを結ぶ要衝で、鉄道駅が設営されるとともに、両者を結ぶ重要な橋が建設されている。

その後戦場をカズベクなる場所に変え、激しい戦闘が繰り広げられた結果、勇士カラサイは負傷してしまう。「クズルバスへの道の入り口を確保せよとの知らせをアデイルの戦友が伝え、カラサイとカズに率いられる軍勢はカズベクという町を占領することにした。六日にわたるクズルバスとの戦いが始まった。その中でカラサイは負傷してしまった」<sup>14</sup>。

キジルバシュが攻め落とした町カズベクはロシアとグルジアとの国境近くにあるカズベク山を意味すると考えられる。カズベクはカフカース山脈中央部に位置し、カフカース山脈でもっとも高く(標高5033m)、またもっとも美しいと称される山頂である。「キジルバシュへの道の入り口」という表現は、イラン地方につながるカフカース北部の要衝をうまく示している。またカラサイが負傷してしまう場面は、勇猛な戦士をも苦しめるキジルバシュの破竹の勢いを示している。

中央ユーラシア・テュルクの叙事詩の多くは主人公の凱旋帰国で大団円的に幕を閉じるが、反対に主人公の死という悲劇的な結末を迎えるものも少なくない。ノガイやカラカルバクに伝わるヴァリエーションでは、クリミアの勇士アデイルがキジルバシュに殺されて幕を引く<sup>15</sup>。「アデイルの軍勢は戦利品を集めていた。集めているときにアデイルは穴に落ちてしまった。クズルバスは暗い穴の中のアデイルを発見し、穴に入っていった。アデイルは

脇の刀を振りまわして、彼らに応戦していた。しかし、アディルは捕らえられ、両手を結ばれて連行された。これまでノガイのどんな勇士も来たことのない遠い場所に彼はひとり残された<sup>16</sup>」。あるいは、「戦いに疲れたアディル・スルタンは道中、一人になって少しだけ休み、横になって眠ってしまった。そのあいだにクズルバスたちが彼を取り囲み、捕らえて、殺してしまった<sup>17</sup>」。このように、強力なキジルバシュ軍団によって命を落したアディルの姿は、強い悲劇性をもって後世に伝えられ続けてきたのであった。

『カラサイ、カズ』、『アディル・スルタン』などのノガイ大系や『コブランドウ』などにキジルバシュとの戦いの記憶が刻まれていることは、彼らとの歴史的な関係の深さがうかがえるが、17世紀以降の歴史について歌った作品にキジルバシュが登場することはほとんどなくなった。これに替わってカルマクが多く登場するようになるのである。

### 3. カルマク

カザフやカラカルパクなど中央アジアのテュルク民族の叙事詩において、敵として最も多く登場する集団はカルマクであろう。カルマクとはオイラト系の西モンゴル人を指す、テュルク系民族による総称で、なかでもトルグート部やジュンガル部が中央ユーラシアとのかかわりでは重要な集団である。ジュンガル部は「最後の遊牧帝国」とも称される強力な国家を建設し、中央ユーラシアをしばしば攻撃・席卷した。彼らの一連の攻撃を逃れる人々の移住が、現在見られるような中央ユーラシアの民族構成や民族分布に大きな影響を与えたといわれる。この時の災難は、たとえばカザフでは「アクタバン・シュブルンドゥ（裸足での逃走）」という固有の言葉で後世に伝えられた。英雄叙事詩もこのときの辛苦を後代にまで伝える大きな役割を果たしたことは言うまでもない。

カザフとカルマクとの抗争が長く続いたことは多くの叙事詩に歌われる。たとえば、18世紀のカルマクとカザフとの戦いを背景としたカザフの叙事詩『アルカルク・バトゥル』では、

カザフのハンが治めていた時代、  
カザフとカルマクは戦利品を取って敵同士になった。／  
敵となりカザフとカルマクは家畜を取り合った  
終わりのなき戦いが起きて、血で血を洗いあった<sup>18</sup>。

と歌われる。カルマクとの戦いは、カザフのみならずクルグズとも行われた。それは、クルグズに伝わる『マナス』でも主なテーマとなっている。カルマクの戦いの一つは次のように描かれる。

7千もの兵士が時の声をあげて

(敵の)二人のうち一人が攻撃を受け、7人のうち3人が死んだ。

クルグズは(敵の)兵士を追いやり、斧を額に打ち込んで

5、6人が四方へ散って、敵に切りつけた

土埃が舞い上がり、山の斜面を血に染めて

死者の数を数えて／

カルマクに罰を与えてやったのだった<sup>19</sup>。

ここにはクルグズがカルマクに対して激しく残忍に反撃したことが描かれている。またカザフなどに伝わる『エル・タルゲン』では、主人公タルゲンがカルマクに対して勇敢に戦う様子がこう歌われる。

カルマクが来て包囲した。

アッラーと叫んでタルゲンは攻撃した。／

羊の群れに一頭の狼が飛び込んだ。

たくさんのカルマクが倒れる。勇士の力がぶつかる。

タルラン馬は汗だくになった。無数の敵と戦い合った。

ウズベクやカザフ、カラカルパク、バシコルト（バシキール）などに広く伝わる中央ユーラシアの代表的な作品である『アルパミシュ』では、カルマクのタイシャというハンがカルマクの地にやってきた、コングラト族の勇士アルパミシュに提案する。「タイシャが『少年よ、6ヶ月の遠き地から許嫁を探しに来たのか。相撲で勝利すれば許婚のバルチンを手にできるぞ』と言うと、アルパミシュはこれを受け入れた。力士が現れた。相撲が始まった。敵をつかみ、ハンの足元に投げた。相手はすでに生きていなかった。30分後、9人の力士たちが敗れ去っていた。誰も彼と戦おうとしなかった。』<sup>20</sup>

アルパミシュに勝つことができないと悟ったカルマクの人々は、卑怯な手を使ってでも彼を倒そうと彼の愛馬バイシュバルを殺そうとする。それは、ついに流血の争いへと発展する。「カルマクはバイチュバルを殺そうとした。しかし近づいてきたカルマク人をチュバルは蹴り上げた。アルパミシュは、「戦おうというものは誰もいないようだな」と言って、チュバルに乗った。カルマクたちは彼を取り囲み、そこから帰そうとしなかった。アルパミシュは怒った。カルマクはアルパミシュに矢を射た。しかし、矢は届かなかった。アルパミシュは、無数のカルマクの中に、チュバルを駆った。刀を振りまわした。カルマクの首をはねた。彼の刀が曲がるほどであった。』<sup>21</sup>

このように叙事詩では、カルマクは中央アジアの人々にとって不倶戴天の敵とされ、激烈に戦いあう様が描写されるが、叙事詩には、カザフなどテュルク系の人々とカルマクとの敵対関係や戦闘シーンだけが描かれているわけではない。ここではそうした単純な対立

構図にあてはまらない例についてとりあげてみよう。

『アルパミシュ』の冒頭部分には、主人公の父と許婚の父が仲違いをしてしまい、その結果、許婚の家族が故郷を離れて、カルマクの国へ移住するというシーンがある。それは、故郷を捨ててしまったという前提もあるだろうが、カルマクが移民してきたテュルク系の人々を受け入れたことを意味している。「バイサル<sup>22</sup>は6ヶ月と440日離れたタイシャ・ハンの支配するカルマクの地へ移動することを決めた。90頭のラクダに荷を積んだ。「バルチンは、宗教を知らぬカルマクに嫁がせる」というバイサルに、妻アルトゥン・サチは「やはり故郷に戻りましょう」と言ったが、彼は聞き入れなかった。6ヶ月と40日かけてカルマクのくににたどり着いた。カルマクのくにで彼らは貧しい暮らしをしながら、税を納めて過ごした。」<sup>23</sup>

バイサルはアルパミシュと同じテュルク系部族コングラトの人であり、カルマクから見れば「異民族」である。しかし作品からは、「異民族」であっても、貢納さえすれば、カルマクの地で遊牧しながら、暮らすことをカルマクが許可したことがうかがい知れる。もっとも、そこでカルマクのハンに優遇されるはずはなく、カルマクのやせた土地で苦しい生活を送ったということが叙事詩では強調されて歌われているが。

さて、中央アジアの人々を苦しめたカルマクであるが、必ずしも完全なる悪、憎むべき敵としてのみ描かれているわけではない。カルマクにも勇敢で実直な人物がいることは、多くの叙事詩に歌われている。またカルマクの生まれでありながら、主人公と親友になるという例もある。この点について、『アルパミシュ』に登場するカルマクの勇士カラジャンを参考に見ていこう。

カラジャンは勇敢で力強い戦士であったとされ、叙事詩では優れた勇士として肯定的な評価がなされる。またカラジャンは、主人公アルパミシュの許婚を得んとするカルマクのタイシャ・ハンに対して、「ハンの任務は統治にあり。その娘を得ようとするのは彼の任にあらず」と言い放った<sup>24</sup>。もちろん、カラジャン自身が主人公の許婚の娘との結婚を望んでのことであるが、一方で姦計を用いてでも娘を自らの手に入れようとする邪なハンと対比した高潔な人物であることが強調されている。

アルパミシュとカラジャンとの一騎打ちからはさまざまなことを読み取ることが可能であると考えられる。まず一騎打ちは、「カラジャンが『おまえが先に攻めよ』」というと、アルパミシュは『おまえの鬚は白い。年長のおまえが先に攻めよ』と答えた」<sup>25</sup>と、年輩のものが先に攻撃を仕掛けるという戦闘上のしきたり、あるいは年長に先攻権を与えることが理想的であったということが示されている。

さらに、こうした敵との戦いではイスラーム的要素も強調される。アルパミシュとカラジャンとの戦いでは、「アルパミシュを命名した7人の聖者が現れた。霊力でアルパミシュを鉛のように重くした。アルパミシュは非常に重かったため、カラジャンには持ち上げることができなかった。カラジャンは「彼は胡桃の木で、深く根付いているかのようだ」と

思い、アルパミシュに攻撃権を与えた。アルパミシュは神の御名を三度唱えて、7人の聖者を呼びながら、カラジャンを持ち上げ、投げ落とした」<sup>26</sup>と、アルパミシュの名付け親であるイスラーム聖者の加護を受けながら体を重くし、微動だにしない。攻撃の際にはアッラーと唱えることで特殊な神通力を発揮し、相手を倒す。つまり、彼自身の力のみによるのではなく、むしろ神や聖者の加護により、勝利したことが歌われているのである。

叙事詩がイスラームにたいする篤い信仰心を重視することは、その後の場面にも見られる。敗北したカラジャンはアルパミシュに許しを乞い、イスラームへの改宗を誓う。「私は愚かにも、自分が優れていると勘違いしていた。私はあなたの神を受け入れ、その神の信徒を認め、あなたの友人となる所存である。私はムスリムとなった。我が神は唯一神である」<sup>27</sup>。アルパミシュは攻撃を止め、カラジャンにイスラームの教義を教え込むとともに、互いに抱擁し合って、友人となった<sup>28</sup>。同様なパターンはクルグズの『マナス』にも見られる。カルマク（ヴァリエントによっては後述する中国）の勇士アルマンベトはムスリムではなかったが、マナスと出会い、彼の高潔さに心打たれて、アッラーを信仰するようになる。

カルマクはチベット仏教徒であり、先に見たキジルバシュは同じイスラームではあるものの、宗派の異なるシーア派であった。つまり、彼らと敵対する理由は「異民族」であることではなく、信仰を異にする「異教徒」であるためであり、異なる宗教・宗派が対立の根拠であると叙事詩は歌っている。ここからは中央ユーラシアの叙事詩のテーマと何をもって「敵」と見なすかをうかがい知ることができそうである。

ところで、「カルマク」という言葉が、歴史上実在した特定の集団を指すではなく、「異民族」を意味する「記号」となっている部分があることも指摘しておきたい。

上述した『カラサイ、カズ』のカザフのヴァリエント<sup>29</sup>には、コンドゥケル Qongdyker なる名称の集団が登場する。コンドゥケルはフンカル Khun kar に同定される言葉である。フンカルはオスマン帝国で「オスマン皇帝」を意味し、この言葉に由来する「フンカル国」とは、18-19世紀の清朝資料をはじめとして、カザフ・モンゴルの間でもオスマン帝国を指した<sup>30</sup>。『カラサイとカジ』には、「コンドゥケルというカルマクから勅書がきた。（勅書には）アディル・ハンにカラサイとカジを呼び寄せ、カルマクを攻撃せよと（書いてあった）<sup>31</sup>」と歌われる。コンドゥケルからアディルに勅書が来たということは、オスマン皇帝から出征の勅令がクリミア・ハンの息子に届いたことにほかならない。しかし、ここではオスマン皇帝に対し「コンドゥケルというカルマク」という表現がなされ、キジルバシュではなく「カルマクを攻撃せよ」という言葉と合わせて考慮すると、「カルマクであるコンドゥケルがカルマクを攻撃する」という矛盾が浮かび上がる。史実では、アディルたちが戦った相手は、上述のようにキジルバシュ（イラン）であるからである。このことは一見奇妙なことであるが、おそらく、ここでは「カルマク」という言葉は西モンゴル、オイラトの人々という具体的な集団を指すのではなく、単に自分たちと異なるアイデンティティ



をもつ集団という意味で用いられているのではないだろうか。

カザフの叙事詩では、カルマクが具体的なモンゴル系民族としてだけでなく、単なる「異民族」という文脈でも使われることが多く、『チョラ・バトゥル』でのロシアや『カラサイとカズ』などにおけるキジルバシュに対しても、これらに替わって「カルマク」がしばしば用いられた<sup>32</sup>。これは、「アクタバン・シュブルンドウ」をはじめとする、カルマクによる過酷な攻撃が強く記憶に刻まれたことから、カルマクがそのまま敵の「異民族」を指し示す象徴的な言葉になったことが推測される。カルマクの説明として、「敵の民族名という狭い概念だけではなく、一般的な勇士の敵を意味する」とされることさえある<sup>33</sup>。カルマクが表層としてそれ以前の歴史的記憶に覆いかぶさったことは、『チョラ・バトゥル』のヴァリエーション比較によっても明瞭である<sup>34</sup>。「カルマク」という言葉は、とりわけカザフやカラカルパクにおいて、他の「異民族」とはもつ意味合いが異なる点が特徴的で注意を要する。

#### 4. ロシア

中央ユーラシアのテュルク系叙事詩に描かれる「敵民族」として、北方のロシアも様々な作品に登場する。ロシアの描かれ方は時代によって様々ではあるが、中央ユーラシア・テュルクの歴史を如実に反映している。ロシアが登場する作品は16-20世紀とたいへん長いスパンにわたるさまざまな歴史事象を描いていることが、特徴的であるといえるだろう。なお、ロシアを指す言葉は複数あるが、叙事詩の本文中では原語でそれらを示す。

ロシアとの関係を具体的に伝える叙事詩のうち古い時代を舞台としているのは、叙事詩『エディゲ』である。

『エディゲ』はノガイ大系の作品のひとつで、ノガイ・オルダの創設者であるエディゲ(1356?-1419)を主人公にしている。エディゲは、ジュチ・ウルス(所謂キプチャク・ハン国)のトクタミシュ・ハンの庇護の下で頭角を現すが、やがて彼と反目し、ティムールの援助を受け、キプチャク草原の覇者となった。彼の政権はノガイ・オルダの礎となり、それは、以後この地域において重要な役割を果たすこととなった。エディゲは、ジュチ・ウルスのトクタミシュ・ハンと戦うだけでなく、リトアニアやロシア(モスクワ公国)など周辺諸国をも攻めた。

『エディゲ』には、エディゲがロシアを侵攻したことが暗示されている。ティムールの娘をさらった、ロシアのアニシムなる勇士をエディゲが攻撃し、ティムールの娘を奪い返す模様が描かれている。その際、アニシムを殺し、戦利品を奪ったことも叙述される<sup>35</sup>。これはエディゲが1408年に行ったモスクワ侵攻を表していると考えられるだろう<sup>36</sup>。「エディゲは堅固な石のクレムリンを襲撃しないことにした。年代記によれば、壁からの激しい射撃のため、オルダの人々は町にあえて近づこうとはしなかった。ひと月におよぶ包囲のあと、敵軍は隣国の大地を荒廃させ、捕虜を連れて後退した。エディゲの襲来は実質的

に終わった。ロシアにおけるハンの権力復興は成功しなかった」<sup>37</sup>。叙事詩でロシアの勇士アニシムがティムールの娘をさらったというのは史実ではないが、このような当時のキプチャク草原周辺の状態を示しているのは確かなことである。

なお、エディゲがロシアにたいする攻撃を行ったことによって、ソ連時代に、叙事詩『エディゲ』は「封建的で人民に有害<sup>38</sup>」であると評され、テキストの出版・公刊をはじめ、テキストを閲覧することも禁じられ、これを語ることすら許されなかった。ロシアを攻撃する場面がある『エディゲ』のテキストは、このシベリア・タタールのヴァリエントをのぞいて見られないが、そのこととこうした「エディゲ批判」との間になんらかの相関関係があったのかもしれない。ソ連末期のペレストロイカ政策の下、「エディゲ批判」は下火になり、ソ連崩壊後になってようやく、『エディゲ』のテキストが出版されたり、これに関する本格的な研究が行われたりするようになったのである。

さて、ロシア（モスクワ公国）が領土を拡張し、広大な領域をもつ帝国に発展する最初の対外活動となったのはカザン攻略である。ジュチ・ウルスの後継国家であるカザン・ハン国はカザンを都とし、ヴォルガ川中流域に栄えていたが、16世紀前半には、政権内部で内紛が頻発し、ロシアの側につく一派とクリミア・ハン国の側につく一派とに分かれ、対立していた。ロシアの傀儡のハンとクリミア・ハン国の傀儡のハンが交互に即位するような状況の中、1552年にロシアがカザンを攻略し、これを併合したのである。このカザン陥落を題材にした作品が『チョラ・バトゥル』である。タマ族の勇士チョラがカザンへ義勇の兵として赴き、ロシアの軍隊と戦い、一時は彼らを撃退するものの、最終的には戦死してヴォルガ川に沈み、カザンがロシアの手に渡るという内容である。

チョラがカザンのシャー・アリ・ハンのもとでロシアとの戦いを行った様子は、タタールに伝わる『チョラ・バトゥル』では、次のように描かれる。なお、シャー・アリ・ハンは、数回にわたって在位したカザン・ハン国末期のハン（在位1518-21, 1546, 1551-1552）である。「チョラ・バトゥル<sup>39</sup>はカザンの町へ行った。そこでバトゥルたちと交わり、カザンの町を落そうとしているロシアの軍隊と戦おうとしていた。そのときカザンの町にシャガリ・ハン<sup>40</sup>というハンがいた。シャガリ・ハンはチョラ・バトゥルが来たことを聞いて、呼び寄せ、敬意を表し、宝庫から外套や鎧、兜、食料などを与え、バトゥルたちに加わって、指揮した。チョラ・バトゥルをこの日から賞賛した。チョラ・バトゥルは毎日軍とともに戦い、多くの人々に恐れられた。」<sup>41</sup>

また無敵のチョラを是が非でも倒そうとするロシアが一計を案じる様子は次のように描かれる。

「そのころチョラ・バトゥルが敵ロシア Urys と戦っていた。ロシア軍はチョラ・バトゥルを殺す方策が見つからず、占星術師にチョラ・バトゥルの死の原因は何かと聞いた。占星術師は天球儀をみて答えた。「チョラ・バトゥルにロシアの娘が与えられ、その娘から男の子が生まれれば、その子がチョラ・バトゥルの死の原因となるであろう」と。賢い將軍

たちはこのことについて相談し、ある娘に美しい衣服を着せ、車に乗せ四頭の馬をつけて、そばには下女を置いて、チョラ・バトゥルに嫁がせた。実は、その娘にはチョラ・バトゥルの子供を宿したら、ロシアに逃げ帰るよう説き伏せてあったのである。娘はチョラ・バトゥルのもとに来ると、チョラ・バトゥルはこの娘がたいへん気に入った。その後長い時間が過ぎ、チョラ・バトゥルのもとで妊娠した。そして娘は逃げた。ロシアに帰り、男の子を産んだ」<sup>42</sup>。

このチョラの息子がやがて立派な戦士に成長し、やがてチョラと戦って父の命を奪うのである。『チョラ・バトゥル』は、父子の戦いと主人公の死という悲劇的な要素を強く含んだ代表的作品のひとつであるといえよう。

さて、先に述べたような「異教徒」との戦いというテーマは、ロシアとの戦いを歌う叙事詩にも流れている。ロシアとの戦いは侵略する「異教徒」からイスラームの世界を守るジハードとして位置づけられており、それは『チョラ・バトゥル』では、チョラの決意の言葉によって示されている。

シャガリ・ハンのくにとのために、サルカニ<sup>43</sup>の心のために  
蒼い駿馬を疲れさせずに、名刀「青い竿」を黒い血で濡らさずに  
この異教徒の戦いを目に、このイデル<sup>44</sup>に沈ませずに  
この異教徒が私に出させずに、  
(われらの) 聖なるモスクを建たせずに、「アッラー」とアザーン<sup>45</sup>を言わずに  
わが望みが叶わずに、戻れようか！戻れようか！<sup>46</sup>

このような崇高な使命感をもって、ロシアと戦い続けたチョラであるが、物語はチョラの死という悲劇的な結末で終わる。「チョラ・バトゥルは敵の兵士の中に入り、彼らを倒したが、息子だけは殺せずに長い時間がたち、馬の足は赤くなり、立っていられなくなり、ついに馬はイデルに沈み、チョラ・バトゥルは溺れて死んだ。」<sup>47</sup>

チョラの最期の言葉は、次のように述べられる。

カザンにはいくつもの黒い河の流れ、  
私は芦の茂る浅瀬に沈んでいく。  
深くもなく、浅くもない、  
今後の我らのような勇士たちに幸運はない。  
そしてカザンという名の町もない<sup>48</sup>。

チョラの死はカザン・ハン国の死の象徴である。この辞世の句に歌われるように、チョラの戦士とともに、カザンも落ちたのである。これ以後、モスクワ公国はアストラハン・

ハン国占領(1556年)、シベリア・ハン国征圧(1582年)、クリミア・ハン国併合(1783年)などを次々と行い、領土の拡張を図っていった。そしてモスクワ公国は、やがてロシア帝国という大国へと発展するのである。

18世紀に入ると、ロシアと中央アジアとの関係が急激に深まっていった。先に述べたように、カルマク(ジュンガル)の中央アジア攻撃によって、中央アジアの人々は疲弊していた。カルマクによる被害がとくに厳しかったカザフでは、小ジュズのアブルハイル・ハンや中ジュズのアブライ・ハンがロシアに臣従を誓ったが、これはジュンガルの攻撃を交わすための便宜的なものであった。アブライは、ロシアだけでなく、中国(清朝)へも朝貢を行って関係を維持し、この二重朝貢によってカザフの自立を確保しようとしたのであった。こうした功績から、アブライはカザフのハンの中でもとくに名君の誉れ高く、現在でもカザフ人の民族的英雄の一人となっている。そのアブライの生涯と功績を歌った叙事詩も数多く語り伝えられてきた<sup>49</sup>。アブライはロシアとの関係を重視しながら、

ロシア Orys にわが息子トグムを使者として、  
友人になり平和に暮らそうと送った。  
商業で両国がやっていくために、  
クズルジャル<sup>50</sup>という町をすぐに整備した。  
当時、クズルジャルには宮殿があった。  
アブライのアク・サライ(白い宮殿)と呼ばれていた<sup>51</sup>

とロシアとの交易を盛んにしようと考えていたことが伝えられる。アブライをはじめ、カザフはカルマクの大きな脅威のためにロシアに接近したのであるが、互いに貿易を盛んにするということもその主要な目的であったのである。アブライの息子が使者として描かれているが、実際、ハン家一族の子弟が正使として皇帝の元に派遣されていた<sup>52</sup>。

カルマクの侵攻を背景としたロシアとの関係は、『アルカルク・バトゥル』にも映されている。カザフの勇士アルカルクに危険が迫ったときに、友人のタティがロシアに行くよう提案をするが、これを「タティのこの言葉は知恵あるものだ。この言葉をロシア Orys の国も同意する」<sup>53</sup>と賢明なものであると叙事詩はいう。

しかしこうしたロシアとの関係も、ロシアの影響力が強まるにつれて、必ずしも良好なものではなくなっていく。とくにロシア帝国の統治下にある地域では、各地でこれに異論を唱える反乱がくり返し起こった。たとえば、ウラルのテュルク系民族バシコルト人は、帝政ロシア支配下の17世紀後半から幾度も反乱を起こし、いずれも鎮圧されている。これには、毛皮や蜂蜜など、ツァーリに納めていたヤサーク(現物税)の取立てが厳しく、困窮していたという背景がある。その後、1773-75年に起きた「プガチョフの反乱」には、多くのバシコルト人が加わった。この反乱の特徴は、中心的役割を担ったロシア人のみ

ならず、マリ人、ウドムルト人、カルムイク人、チュヴァシ人、カザフ人など様々な民族が、また農民を中心に工場労働者や商人など多様な人々が参加したことである。反乱の首謀者であったプガチョフは皇帝ピョートル3世の名を騙って、人々を扇動し、民衆の心をつかんだのだった。

この反乱では、ロシア人に次いでバシュコルト人が重要な役割を演じた。その時の記憶は、叙事詩の形でバシュコルトの人々に語り継がれてきた。バシュコルト人の反乱指導者サラワト・ユラエフを主人公とした『ユライとサラワト』には「国を閉ざす海の皇帝との戦いをはじめた。皇帝の土地をつかむだろう<sup>54</sup>」とロシア皇帝との戦いを始めたことが歌われる。サラワトがプガチョフを認めて、彼と行動を共にする決意は「その日、サラワトはブガサウ Būgäsäu（プガチョフ）がすべての民に自由と大きな公正を与えた勇敢な勇士であることと心から納得し、反乱軍に大砲をとった<sup>55</sup>」と示される。彼が反乱軍に加わったのは、1773年11月のことであった<sup>56</sup>。さらに、

サラワトは戦いととも、工場主との争いととも。  
プガチョフがやってきたら、皇帝の側につくタルハン<sup>57</sup>を  
貴族たちを驚かせ、近くの工場の持ち主を脅しつけた。  
すべてをその手に入れたのは、彼である<sup>58</sup>。

とプガチョフの蜂起が工場主であった貴族など支配層に脅威を与えたことが述べられる。サラワトは逮捕後、ロシア人の殺害を意図していなかったことを強く主張した<sup>59</sup>。彼の行動は単純な反ロシア的行動ではなかったというのであるが、彼が戦うべき相手を工場主や皇帝、貴族などに見定めていたことは叙事詩にも歌われているのである。なお、ここでいう工場とは、ウラル地方の製鉄・製銅工場のことである。過酷な労働環境で働いていた多くの工場労働者もこの反乱に加わり戦ったのである。工場労働者にはもともとその土地で農業を営んでいた農民で、工場労役に就かされていた者もいた。なお、これらの工場はバシュコルト人の土地を収用して建設されたものであった。バシュコルト人にとって、工場はロシアによる迫害の象徴だったのである。

さて、ロシア皇帝に反逆の烽火を上げたサラワトであるが、反乱は平定され、1774年11月25日、彼自身もついに捕らえられてしまう。その最期は、叙事詩では劇的に伝えられる。

皇帝の軍隊が（サラワトを）包囲した。  
馬に乗ることができずにサラワトは  
500人の騎兵がやってきても、彼を取り囲んだとしても  
手を胸の上に組むことはなかった。  
矢筒が尽き、刀が欠けても

戦いの音が轟いたとき、群れとなった20人を殺し、300人を打ち破った！  
その後勇士サラワトは捕らえられた。手足に鉄のかせをはめられて。

そしてさらに囚われたサラワトが彼の意思を継ぐものが現れるように願い、その思いを人々に託したことが歌われる。

サラワトはこう言って、人々と別れた。  
「大地を雪が覆い、古い草が色あせても、  
陽の差す春の雨が、再び新芽を芽吹かせる。  
民のもとからサラワトが去っても、敵が流したこの血潮  
民を敵から守らせよ、敵から仇を取らせよ  
再び勇士を増やさせよ！」<sup>60</sup>

このようなサラワトの願いによるものか、反乱平定後、ロシア人が降伏する一方で、バシユコルトの人々はしぶとく抵抗を続けたという<sup>61</sup>。サラワトはその後、監獄で労働を強いられ、1800年に獄死した<sup>62</sup>。

ロシアの植民地政策に反対する抵抗運動は、18世紀末からカザフ草原でも頻発した。スルムの反乱(1783-97年)やイサタイとマハンベトの反乱(1836-38年)などとともに、アブライの孫ケネサルが率いた反乱も重要である。1822年に導入された「シベリア・キルギスに関する規制」により、カザフ・ハンの統治制度が崩れた結果、カザフ草原にロシアの統治体制が敷かれた。これを不服とするアブライの息子や孫たちが、ロシアに対して攻撃を仕掛けるようになった。ケネサルは祖父アブライの後継者を自認し、ハンを自称し、一連の反乱を指揮した。彼の行った反乱もまた叙事詩のテーマとなり、語り継がれてきた。叙事詩には、ロシア支配が進む中、それに従うものを牽制する言葉が歌われる。

低地にはコーカンド(が<sup>い</sup>るが)、  
草原ではロシア Orys が、町の統治者となった<sup>63</sup>。  
(おまえが)ロシアに行って(彼らに)従うならば、  
偶像の元で拝むならば/  
ケネ・ハンがおまえの平安をとるだろう、  
ナウルズバイ<sup>64</sup>がお前に罰を与えるだろう<sup>65</sup>。

このようにロシアの統治を受け入れないように抵抗を呼びかけたという。偶像の元で拝むという箇所は、異教徒に屈するということを示しているのだろう。そしてロシアに対しては、次のように互いに干渉しあわないような提言をする。

そこでケネサルは言った。

「ペテロパヴェル、クズルジャルを統治したのは－おまえ」と言った。

「ニコライ<sup>66</sup>にとっての敵は－わたし」と言った。

「われら二人が友になるなら、おまえは私に触れるな、

私はおまえに触れはしない」と言った<sup>67</sup>。

もっともこのような意見は、ロシア側には受け入れられるはずもなく、ロシアはケネサルを厳しく弾圧しようとする。そしてケネサルのロシアに対する攻撃が始まった。

ケネがハンの時代、われらは老雄ラクダのように従った。

敵を脅し逃走させ、吹雪く雪のように吹き荒れた。

「アブライ」と叫びながら疾走し、敵の前で駆け回った<sup>68</sup>。

ロシアの要塞攻撃などケネサルの抵抗行動はある程度の成果を得たが、ロシアの反撃に会い、弾圧される。ケネサルは逃亡の末、1847年クルグズと戦って、処刑された。ケネサル亡きあとのカザフ社会については、次のように歌われる。

ケネサルがいなくなってから、われらの玉座は空いたまま／

あとに残った孤児の民、国の豊かさはなくなった。

ついにこの社会は、このような状況になってしまった<sup>69</sup>。

ケネサルに関する叙事詩も、『エディゲ』や『チョラ・バトゥル』のようにソ連時代には、公開されることなく、秘匿された。ソ連時代、ケネサルは「平和なアウルを破壊し、無実の人々を殺害した<sup>70</sup>」と批判の対象となっていた。カザフの人々の間での人気とは裏腹に、「悪者」とされたのは、エディゲやチョラと同様に、彼がロシアを攻撃したためにほかならないだろう。

中央ユーラシアの人々の叙事詩は20世紀に入ると、歴史的により具体的な叙述がなされるようになった。この時期の代表的な叙事詩として、1916年反乱を描いた叙事詩がある<sup>71</sup>。1916年に中央アジアで起こった大反乱の背景には、第一次世界大戦がある。1914年に勃発した第一次世界大戦には、ロシアも参戦していた。ロシア帝国に組み込まれた中央ユーラシアの人々は、その運命をロシアとともにしていた。当時、戦争は長期化し、総力戦の様相を呈していたが、いわゆる異族人である中央アジアの人々の兵役は免除されていた。しかし1916年6月に、中央アジアなどの「異族人」に対して後方支援のための徴用令が出され、19-43歳の男子が戦争のための徴用に駆り立てられたのである。これを不満とする中央アジアの人々は講義や暴動の形で抵抗運動を各地で起こし、やがてロシア支配に対し異

を唱える大反乱へとつながっていった。当時の彼らの心情は叙事詩に反映された。

まず、皇帝の勅令が発せられた日のことは、「時は1916年、ニコライ<sup>72</sup>の勅令を受け取った年。夏の日、6月15日、空は晴れ太陽が輝いた午後<sup>73</sup>」と明示される。そして、戦争に中央アジアの人々が巻き込まれていく様子は次のように歌われる。

脅威が日に日に高まっている、ロシアをドイツが押しやっている  
轟く銃が大きな音を立てて、時の終わりが来たようであった。  
われら信徒は心休まずにこういう、「故郷へ帰れる日はあるのだろうか」と。  
ドイツ German とロシア Resei との戦争の間で、  
羊のようになって喜捨をしながら言う<sup>74</sup>。

わが皇帝はドイツと、二年と半年戦った。  
二人とも偉大な皇帝。敗れることにはお構いなしで、  
互いに倒れぬよう立ちながら。  
この戦いは大きな戦い、皇帝の軍隊の下で、  
ロシア Orys、カザフ、ウズベク、サルト<sup>75</sup>、エステク<sup>76</sup>、ノガイ、トルクメン  
徴用されて生き残るものはなし。  
カザフに知らせた、おまえの仕事は塹壕でと。  
塹壕でというその言葉を、われらカザフで信じたものはいなかった<sup>77</sup>。

叙事詩には、カザフやウズベクなど多くの人々が徴用のため駆り立たされたことが示され、同時にそれにたいする不信感と不安感が表されている。

われらが皇帝 patsha ニコライの幸運は尽きた  
自ら横暴をふるい、恐怖を覚えさせた。  
皇帝の敵は内から外から増えて、  
その目に敵が映り彼の夢は消え去った。／  
われらカザフにたいする皇帝の慈悲はない、  
植民者の嘲笑に苦しむな。  
自由や家畜の所有権がなくなってからは、  
豊かな長寿を喜ぶな／  
皇帝の侮辱から逃れよう、  
生きている限り、皇帝の縛りからもがき続けよう  
不幸と災厄が消え去ったと、  
死ぬならば、死なぬところへ逃げ出そう<sup>78</sup>。(プザウバク・アクン「皇帝の運は尽き



た」)

そしてロシア革命が勃発し、中央アジアも革命の混乱に巻き込まれる。これらの1916年の反乱を描いた作品は、革命後、帝政期の状況がいかに過酷なものであったかを示すために喧伝された側面があり、プロパガンダ的要素が強調されたことも否めない。叙事詩は、プロパガンダとしての役割も担わされたのであった。

## 5. 中国

中国も中央ユーラシアの叙事詩にしばしば登場する周辺の「異民族」である。とくに、中国と関係の深かったクルグズやカザフなど、中国と接する民族に伝わる叙事詩に中国は現れる。もっとも中国にたいする呼び名やそれが示す実態は時代や場面によって多様で異なり、一概に中国という言葉でまとめるべきではないが、ここでは原語を併記しながら、便宜上「中国」と統一して表し、その名称や意味する対象については、個別に見ていくことにする。

クルグズの叙事詩『マナス』に登場する中国の位置はチベット高原の向こう、つまりクルグズから見て東にあり、その地はマンジュリアであったと歌われる。

彼（マナスのおじ）は中国 Qytai に去って元気になった。  
 彼の子供は異人として育つことになった。  
 向かっていった土地は、マンジュリア Manjuriya の草原だった。  
 チベットの向こうの地方であった<sup>79</sup>。

キタイとは中央ユーラシアで一般的に中国を表し、ロシア語にも「中国」の意味で入っている言葉であるが、叙事詩においてこれが具体的に何を指すかについては諸説ある。中国の国家、中国という地域、中国の人々がそれぞれ文脈によって使い分けられ、具体的には、10-12世紀の契丹・西遼（カラキタイ）や17-20世紀の清朝などを示すとされる<sup>80</sup>。しかし、ここではキタイと並んでその土地がマンジュリア、すなわち清朝が興った満州地方であると歌われることから、この地域に源を発する清朝を指していると考えるのが妥当であるだろう。叙事詩はさらに、

向こうの中心は大都市ベエジン Beejin  
 そこからの知らせによるとこうである。  
 数え切れぬ民を治めている長、  
 その皇帝 padysha はエセンカン Esankan。  
 将軍 jang-jung から状況を聞き、カルダイ<sup>81</sup> から情報を聞いた<sup>82</sup>。

と都がベエジンなる都市であり、これが北京語の音声に従っていること、エセンハンといわれる統治者がたくさんの民を統治していることも、ここでいうキタイが清朝の意味で使われていることを暗示しているといえよう。エセンハンは15世紀のオイラト・ハンをすぐさま連想させるが、『マナス』では、エセンハンがカルマク、すなわちオイラトのハンではなく、キタイのハンとされていることや、その名称から非漢民族であることが暗示されていることから、やはり清朝を指していると思われるべきである。

エセンハン率いる中国がクルグズを攻める様子は、次の通りである。

おまえが無邪気にしているとき、エセンハンの勅令を  
そこで見てしまった。  
統治のすべてを、そこで味わったのであった。  
中国 Qytai の偏狭さを、そこで見たのであった。  
他に止めることはなかった、この世の侮辱を。  
エセンハンの国から、500万もの軍勢が襲ってきた。  
粉碎せんと攻めてきた、我らが導く多くの民を。  
のんきにしていって迫害された、注意をしなかったので斬りつけられた  
気をつけなかったので沈んでしまった<sup>83</sup>。

これはクルグズに清朝が攻め入った時の状況を描いているのではなく、東トルキスタンを征服したときのイメージが映し出されていると考えるのが妥当であろう。ノガイ大系やロシアに対する反乱を描いた叙事詩などとは異なり、『マナス』は様々な歴史イメージを取り込んだ架空の物語である。そこから彼らの社会や周辺地域がどのような見方がなされたかを読み取ることとはできても、それ以上の個別具体的な出来事を抽出するのは容易ではないからである。

『マナス』では、自分たちクルグズとキタイとの違いがこう明言される。

ベエジンはどこだ、われらの土地はどこだ？  
(おまえは) 中国 Qytai を自分の支えと考えるのか。  
中国はどこだ、われらの民はどこだ？  
おまえはクルグズを敵とみなし、  
中国を同胞だと考えるのか。  
中国は(おまえを) 同胞とは思えない、  
もしもそう見なしたとしても、  
マナスに対抗するのなら、  
「おまえには何も語る資格がない！」<sup>84</sup>

叙事詩では、このような強い対抗姿勢が示され、中国（キタイ）が明らかな「異民族」であることを強調されるのである。そして、その姿勢はマナスによる「ベエジン侵攻」という架空の遠征を生み出し、『マナス』のクライマックスとして歌われるのである。

ベエジン、すなわち北京への「大遠征」は、1950年代のソ連において政治問題にされたことがある。1940年代には、『マナス』は高く賞賛され、「マナス1100年祭」の開催も予定されるほどであった。しかし、1950年代に入ると、汎イスラーム的かつ封建的性格を持ち、「誇り高き友好的民族」中国人にたいする憎しみを呼び起こすと強く非難され、「大遠征」を歌ったテキストの出版は誤謬であったとされて、出版が禁止された<sup>85</sup>。当時はまだ蜜月関係にあった中国への過剰な「配慮」もまた、『マナス』批判の理由とされたのである。その後『マナス』は「名誉回復」をするのであるが、批判の理由として中国との現実的關係が時代の状況に応じて取り上げられたことは興味深い。

中国との戦いが主要テーマの一つとされる『マナス』であるが、先に見た『アルパミシュ』におけるアルパミシュとカラジャンとの友情のような「異民族」の人物との友好関係も作品の重要な要素として描かれる。『マナス』にはアルマンベトというキタイ（もしくは、3章で見たようにカルマク。語り手によって異なる）出身の勇士が登場し、イスラームを信仰し、マナスの片腕となる。彼は『マナス』に不可欠の重要人物で、中国攻撃に一役買う。「異民族」出身の勇士が作品に欠かせない役割を果たすのは、中央ユーラシアの叙事詩の大きな特徴であるといえよう。

先にも見た『アブライ』には、アブライ・ハンがロシアと平行して朝貢していた中国についても描かれる。アブライ・ハンが中国（清朝）と交易をはじめた経緯は次のように描かれている。

中国 Qytai との友好に心が動き、わが大使を従わせて送った。/  
 双方が交易を行うために行き来して、  
 中国からシャウエシエク Shaweshek にキャラバンが来るならと。/  
 アブライは統治者に信書を送った。  
 使者は許可を得て、通過して、中国の町に入った。  
 皇帝 patsha 住む都、北京 Pejin に休まず進んでいった<sup>86</sup>。

シャウエシエクはカザフスタンの国境から数十キロほどのチョチュク（塔城）である。ここはチュグチャクやタルバガタイの名でも知られる場所で、中央アジアの交易の要衝であった。清朝との関係をもったカザフのスルタンたちは、家畜と布織物、茶などを交換した。またカザフは、ロシア・清朝間の貿易を媒介する役割も果たしたのであった<sup>87</sup>。こうしてカザフと清朝との直接の関係が進展したのだが、1830年代には、ロシアがカザフに対して積極的な姿勢を示すようになったため、清朝のカザフへの影響力は除かれていった<sup>88</sup>。

## おわりに

本稿では、叙事詩で敵の「異民族」とされるキジルバシュ、カルマク、ロシア、中国について、それらがどのような作品にどのように描かれているかを見てきた。様々な時代や歴史事象が多くの叙事詩作品に反映されており、これらが中央ユーラシア・テュルクの歴史認識の形成に影響を与えてきたことは想像に難くない。中央ユーラシア・テュルクの多くの叙事詩は、具体的な歴史的出来事をテーマにした作品にも、架空の人物や出来事をテーマにした作品にも、実在する「民族」が登場し、歴史的背景を強く意識させる構造になっていることが明らかになった。ここで簡単にいくつかのポイントに整理して、中央ユーラシアの人々と「異民族」との関係についてまとめてみよう。

まず、全体的に言えるのは、「異教徒」との戦いというメッセージ性の存在である。チベット仏教徒のカラジャン（『アルパミシュ』）やアルマンベト（『マナス』）をイスラームに改宗させたり、キリスト教徒のロシア（『チョラ・バトゥル』）からカザンを守ることが戦いの目標とされたりと、カルマクやロシア、中国といった「異民族」とはまず「異教徒」であると強調されている。敵のイスラーム改宗や異民族からの防衛は中央ユーラシアの叙事詩の大きなテーマの一つであるといえよう。

次に、「異民族」と戦う主人公の帰属する集団や敵から守るべき「対象」についての問題である。叙事詩に描かれる時代や歴史背景によって、主人公の帰属意識は多様である。キジルバシュと戦うアディルは、クリミア・ハン国という国家を背負っていると描かれる。彼に従うノガイのカラサイはノガイ・オルダという遊牧国家への帰属意識があるからこそ、クリミア・ハン国と運命を共にすることで、当時弱小化していたノガイの存在感を示そうとしている。『チョラ・バトゥル』では主人公がカザン・ハン国を守るためにつまり彼らにとって守るべき対象とは、クリミア・ハン国や、カザン・ハン国、ノガイ・オルダなどの国家である。『エディゲ』もエディゲが自身の政権を確固としたものにしようとしていることをテーマとしている。

これに対して、『アルパミシュ』や『コブランドゥ』、『チョラ・バトゥル』では、主人公がそれぞれコングラト族、キプチャク族、タマ族の出身で、とくにアルパミシュとコブランドゥはそれぞれの部族（部族連合）を「異民族」から守るために戦っている。これらの作品では、部族集団が彼らの帰属意識のよりどころとなっており、国家や政権、あるいは近代的な意味での「民族」ではない。

そして、『サラウト』や『アブライ』、『ケネサル』など18世紀以降の比較的新しい時代を舞台としている作品には、現在の民族意識とも深く関連するような「民族意識」が見られる。『サラウト』ではロシア帝国という多民族国家の中で、バシュコルト人がどのような道を選択すべきかが試され、『アブライ』ではカザフが露清両国と駆け引きをしながら、周辺のクルグズやウルゲンチ、コーカンドの人々と戦う様子が描かれる。アブライが戦う

クルグズやコーカンドはカザフにとっては決して異教徒ではなく、その点では、先にあげた「異教徒」を「異民族」とみなす考え方は相容れない。そこにはこれらの「敵」を「異民族」と見なす「民族意識」の萌芽が見られるかのようである。このような意識は、近代における「民族」の形成や「民族意識」の覚醒を考える上で、示唆に富むものといえよう。もっとも『アブライ』にはカザフという「民族意識」と平行して、『エディゲ』にも見られたような、アブライ政権の維持と発展というテーマもあることを見落としてはならないだろう。

このように中央ユーラシアのテュルク系叙事詩には、様々な「異民族」が出てくるが、それと対峙する主人公側の意識は、ムスリムであったり、国家や政権であったり、部族集団であったり、また現代的な意味での民族とも相通じる意識であったりと多様なのである。

そして注目すべき重要な点は、必ずしも「異民族」が絶対悪として描かれているわけではないことである。敵の勇士との友情は作品のテーマのひとつであり、またその勇士は欠かせない主要な登場人物でもある。ロシアや中国といった「異民族」との交易などのつながりも歌われ、戦うことはあっても、彼らとの関係が必ずしも勧善懲悪という単純な構図とは限らないことには注意すべきであろう。

本稿では、外敵たる「異民族」として周辺の様々な集団を取り上げたが、もちろん、彼らと戦った中央ユーラシアの人々が必ずしも「同胞」として一枚岩で団結していたわけではない。中央ユーラシアの叙事詩のほとんどは、ここで取り上げたような「異民族」を敵としているが、この地域の中での諸集団同士の関係がいかなるものであったかも注目しなくてはならない。

「民族」の記憶を伝えてきた叙事詩に描かれる「異民族」が示唆することは多い。「異民族」との接触がなければ、中央ユーラシアのこれらの叙事詩は生まれなかったことであろう。今回概観してきた「異民族」とのかかわりについて、今後さらに掘り下げていく必要がある。

## 注

- 1) ここでは、中央アジアを中心に、ヴォルガ・ウラル地域や北コーカサス地方を指す。
- 2) 巨人や人間離れした力持ちを意味する。
- 3) 民族の定義は様々であるが、ここでは中央ユーラシアのテュルク系諸民族とは異なる言語や習俗、歴史などの文化背景をもつ集団を「異民族」とゆるやかに定義する。
- 4) Çobanoğlu, Özkul. *Türk dünyası epik destan gelemegi*, Ankara, 2003, 119.
- 5) キジルバシュはカザフ語などでは「クズルバス」とされるため、ここでは原文に従う。
- 6) “Qoblandy batyr”, *Batyrlyar jyry I*, Almaty, 1986, 29.
- 7) 木村暁「中央アジアとイラン——史料に見る地域認識」59頁。
- 8) Qongyratbai, Tynysbek, *Epos jäne etnos*, Almaty, 2000, 153.
- 9) 16世紀後半にノガイ・オルダは、親ロシアの集団（大ノガイ）や親クリミア・ハン国の集団（小

- ノガイ)などいくつかの集団に分かれていた。
- 10) “Ädil-soltan”, *Nogai khalk iyrlary*, Moskva, 1969, 81.
  - 11) “Ädil-soltan”, *Nogai khalk iyrlary*, 83.
  - 12) “Qarasai-Qazy”, *Qazaqtyng batyrlyq eposy*, Almaty, 1992, 61.
  - 13) “Qarasai-Qazy”, *Qazaqtyng batyrlyq eposy*, 60–61.
  - 14) “Qarasai-Qazy”, *Qazaqtyng batyrlyq eposy*, 79.
  - 15) カザフのヴァリエントなどには、アディルは死なずに無事帰国すると歌われるものもある。後述の『チョラ・バトゥル』の結末も参照のこと。
  - 16) “Qarasai-Qazy”, *Qazaqtyng batyrlyq eposy*, 85.
  - 17) “Ädil-soltan”, *Nogai khalk iyrlary*, 85.
  - 18) “Arqakyq batyr”, *Batyrlar jry* 2, Almaty, 1961, 213.
  - 19) *Manas 1-kitep*, Moskva, 1984, 115.
  - 20) Divaev, A. A., *Alpamys-batyr: Kirgizskaya poema*, Tashkent, 1901, 38.
  - 21) Divaev, 38–39.
  - 22) アルパミシュの許婚バルチンの父。
  - 23) Divaev, 6.
  - 24) Divaev, 8.
  - 25) Divaev, 16–17.
  - 26) Divaev, 17.
  - 27) Divaev, 17–18.
  - 28) Divaev, 18.
  - 29) 著名なカザフの語り手ムルン・ジュラウの語りによる。
  - 30) 小沼孝博「「フンカル国」小考——18–19世紀のユーラシア東部におけるオスマン朝認識の一端——」112頁。
  - 31) “Qarasai, Qazi”, *Batyrlar jry* 5, Almaty, 1989, 150.
  - 32) たとえば、本来ロシアを敵とする『チョラ・バトゥル』でも、カザフやカラカルパクでは敵をロシアではなく、カルマクと伝えられる。
  - 33) *Manas 1-kitep*, Moskva, 1984, 530.
  - 34) 拙稿「テュルク英雄叙事詩の地域的特徴～『チョラ＝バトゥル』の分類をもとに～」『地域研究論集』vol. 3 No. 2、国立民族学博物館地域研究企画交流センター、2000年。
  - 35) シベリア・タタール（バラビンスクのタタール）のヴァリエント、Idägä Pi, 51。ドイツ語の翻訳によるため、原語について不明な点がある。バラビンスキー・タタールはトムスク県（当時）のバラビンスク草原に住んでいた。*Istoriia sibirskikh tatar s dreveishikh vremen do nachala 20 veka*, Kazan', 2002, 292–293, 405–406.
  - 36) Grekov, B. D., Yakubovskii, A. YU., *Zolotaya orda i ee padenie*, Moskva, 1950, 246.
  - 37) Kargalov, Kargalov, V. V., *Na granitsakh rus' stoyat' krepo!*, Moskva, 1998, 71.
  - 38) *Idegei, tatarskii narodnyi epos*, Kazan', 1990, 248.
  - 39) タタール語原文テキストでは、チュラ・バトゥル Chura batir。
  - 40) シャガリ・ハンはシャー・アリ・ハンのこと。

- 41) “Chura batyr khikäyate”, *Tatar khalyq ijaty: dastannar*, Kazan, 1984, 115.
- 42) “Chura batyr khikäyate”, 115.
- 43) シャガリ・ハンの娘。
- 44) ヴォルガ川のこと。
- 45) 礼拝の呼びかけ。
- 46) “Chura batyr khikäyate”, 119.
- 47) “Chura batyr khikäyate”, 119.
- 48) “Chura batyr khikäyate”, 119.
- 49) 『アブライ』や後述する『ケネサル』、『サラヴァト』など18世紀以降の歴史的人物を描いた作品を、ジャンルとして「歴史叙事詩」に分類し、架空の人物を主人公とする「英雄叙事詩」と区別する学説もある。もっともこの分類では、史実を踏まえたノガイ大系も「英雄叙事詩」のジャンルとされ、区分の曖昧さがある。
- 50) クズルジャルは、ペトロバヴロフスク（現カザフスタン共和国北カザフスタン州の州都）。
- 51) “Tarikhāt”, *Abylai khan*, Almaty, 1993, 121.
- 52) 野田仁「露清関係とカザフ草原——帝国支配と外交の中の地域認識」36頁。
- 53) “Arqakyq batyr”, *Batyrlyar jyry* 2, 248.
- 54) “Yurai menän Salawat”, *Bashqort khalyq ijady* 5, Öfö, 2000, 260.
- 55) “Yurai menän Salawat”, *Bashqort khalyq ijady* 5, 283.
- 56) 豊川浩一『ロシア帝国民族統合史の研究——植民地政策とバシキール人』北海道大学出版会、2006年、371頁。
- 57) バシユコルトの高官の称号。
- 58) “Yurai menän Salawat”, *Bashqort khalyq ijady* 5, 285.
- 59) 豊川、374頁。
- 60) “Yurai menän Salawat”, *Bashqort khalyq ijady* 5, 287–288.
- 61) 中村仁志『ブガチョフの反乱』平凡社、1987年、233–234頁。
- 62) 豊川、373頁。
- 63) “Kenesary-Nauryzbai”, *Tarikhi jyr* 3, Almaty, 1996, 20.
- 64) ケネサルの弟で、抵抗運動をともにした。
- 65) “Kenesary-Nauryzbai”, *Tarikhi jyr* 3, 24.
- 66) ニコライ 1 世（在位1825–55）。
- 67) “Kenesary”, *Tarikhi jyr* 3, Almaty, 1996, 83.
- 68) “Kenesary-Nauryzbai”, *Tarikhi jyr* 3, 43.
- 69) “Kenesary-Nauryzbai”, *Tarikhi jyr* 3, 44.
- 70) *Istoriia Kazakhskoi SSR* 3, Alma-Ata, 1979, 174.
- 71) 1916年の反乱について歌った詩は、さまざまなアクン（詩人）がこのテーマで作品を残している。これらは語られていた時期と採録された時期とがほぼ同じ時期であることが、他の作品と大きく異なる点である。
- 72) ニコライ 2 世（在位1894–1917）。
- 73) Kenjebaev, 1958, 113–114.

- 74) Kenjebaev, 1958, 119.  
75) 革命まで中央アジア南部オアシス地域の定住民を意味した言葉。革命後はウズベク人に数えられた。  
76) バシュコルトを意味する。Kuzeev R. G., *Proiskhozhdenie bashkirskogo naroda*, Moskva, 1974, 172.  
77) Kenjebaev, 123. バッタル・アクンの「バッタルの詩」より。  
78) Kenjebaev B., Shamenov K., *1916 jylyghy koterilis jyrlary*, Almaty, 1958, 108–109.  
79) *Manas 1-kitep*, Moskva, 1984, 39.  
80) *Manas entsiklopediya 1*, Bishkek, 1995, 380.; *Manas 1-kitep*, Moskva, 1984, 533.  
81) 清朝における行政官の職位、あるいは『マナス』ではカルマクやキタイにおける高級官吏。  
*Manas 4-kitep*, Bishkek, 1997, 540.  
82) *Manas 1-kitep*, 121.  
83) *Manas 1-kitep*, 92.  
84) *Manas 3-kitep*, Moskva, 1990, 243–244.  
85) *Manas entsiklopediya 1*, 319.  
86) “Tarikhat”, *Abylai khan*, Almaty, 1993, 162–163.  
87) 野田仁「露清の狭間のカザフ・ハーン国——スルタンと清朝の関係を中心に」46–47頁。  
88) 野田仁「露清関係とカザフ草原——帝国支配と外交の中の地域認識」253頁。

## 参考文献

- “Ädil-soltan”, *Nogai khalk iyrlary*, Moskva, 1969.  
“Arqakyq batyr”, *Batyrlar jry 2*, Almaty, 1961.  
Çobanoğlu, Özkul. *Türk dünyası epik destan gelemeği*, Ankara, 2003.  
“Chura batyr khikäyate”, *Tatar khalyq ijaty: dastannar*, Kazan, 1984.  
Divayev, A. A., *Alpamys-batyr: Kirgizskaya poema*, Tashkent, 1901.  
Grekov, B. D., Yakubovskii, A. YU., *Zolotaya orda i ee padenie*, Moskva, 1950.  
*Idegei, tatarskii narodnyi epos*, Kazan', 1990.  
“Idägä Pi”, Radlov, V. V. *Proben der Volksliteratur der nördlichen türkischen Stämme 4*, SPb., 1872.  
*Istoriia Kazakhskoi SSR 3*, Alma-Ata, 1979.  
*Istoriia sibirskikh tatar s dreveishikh vremen do nachala 20 veka*, Kazan', 2002.  
Kargalov, Kargalov, V. V., *Na granitsakh rus' stoyat' krepko!*, Moskva, 1998.  
“Kenesary”, *Tarikhi jyr 3*, Almaty, 1996.  
“Kenesary-Nauryzbai”, *Tarikhi jyr 3*, Almaty, 1996.  
Kenjebaev B., Shamenov K., *1916 jylyghy koterilis jyrlary*, Almaty, 1958.  
Kuzeev R. G., *Proiskhozhdenie bashkirskogo naroda*, Moskva, 1974.  
*Manas 1-kitep*, Moskva, 1984.  
*Manas 3-kitep*, Moskva, 1990.  
*Manas 4-kitep*, Bishkek, 1997.



*Manas entsiklopediya 1*, Bishkek, 1995.

“Qarasai-Qazy”, *Qazaqtyng batyrlıq eposy*, Almaty, 1992.

“Qarasai, Qazi”, *Batyrlar jıry 5*, Almaty, 1989.

“Qoblandy batyr”, *Batyrlar jıry 1*, Almaty, 1986.

Qongyratbai, Tynysbek, *Epos jäne etnos*, Almaty, 2000.

“Tarikhat”, *Abylai khan*, Almaty, 1993.

“Yurai menän Salawat”, *Bashqort khalyq ijady 5*, Öfö, 2000.

小沼孝博「『フンカル国』小考——18-19世紀のユーラシア東部におけるオスマン朝認識の一端——」『清朝における満・蒙・漢の政治統合と文化変容』平成14-17年度科学研究費補助金研究成果報告書、2006年3月。

木村暁「中央アジアとイラン——史料に見る地域認識」宇山智彦編『講座スラブ・ユーラシア学2』講談社、2008年。

坂井弘紀「英雄叙事詩と「国家」:「アルパミシュ」と「マナス」を例に」『ポスト社会主義圏における民族・地域社会の構造変動に関する人類学的研究』平成13-14年度科学研究費補助金研究成果報告書、2003年。

坂井弘紀「テュルク英雄叙事詩の地域的特徴～『チョラ=バトゥル』の分類をもとに～」『地域研究論集』vol. 3 No. 2、国立民族学博物館地域研究企画交流センター、2000年。

豊川浩一『ロシア帝国民族統合史の研究——植民地政策とバシキール人』北海道大学出版会、2006年。

中村仁志『プガチョフの反乱』平凡社、1987年。

野田仁「露清の狭間のカザフ・ハーン国——スルタンと清朝の関係を中心に」『東洋學報』第87巻第2号、2005年。

野田仁「露清関係とカザフ草原——帝国支配と外交の中の地域認識」宇山智彦編『講座スラブ・ユーラシア学2』講談社、2008年。

(SAKAI Hiroki)

